

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：32620

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520308

研究課題名(和文) 19 - 20世紀転換期のブラック・フェミニズムにおける政治的言説

研究課題名(英文) Political Discourse in African American Feminism at the Turn of the Twentieth Century

研究代表者

宮津 多美子 (Miyatsu, Tamiko)

順天堂大学・医療看護学部・准教授

研究者番号：60509660

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：この研究は19世紀末から20世紀初頭にかけてアメリカ社会で奴隷制という過去と向き合い、人種・ジェンダー差別と戦ったアフリカ系アメリカ人(黒人)女性の政治的言説をフェミニズムの中で位置づけるものである。この時期の黒人女性指導者のうち、主にメアリ・チャーチ・テレル、アイダ・B・ウェルズ＝バーネット、アンナ・ジュリア・クーバー、フランシス・E・W・ハーパーと彼女らの著作、講演を扱った。各地で組織された女性クラブでは、黒人女性による本格的な政治運動には至らなかったが、高等教育の恩恵に預かったこれらの黒人女性は積極的に政治的メッセージを発し、黒人女性の政治・社会意識改革に貢献した。

研究成果の概要(英文)：The study aims to position political statements made by African American women leaders, who overcame past traumatic memories of slavery and tackled race and gender prejudices, at the turn of the twentieth century within the history of black feminism. Among the black women leaders of the time, the actions and works of Mary Church Terrell, Ida B. Wells-Barnett, Anna Julia Cooper and Frances Ellen Watkins Harper were focused on. Although locally-organized women's clubs could not address political setbacks black women faced, these women leaders, most of whom had college educations, sent out radical messages and contributed to arousing women's political and social consciousness.

研究分野：アメリカ文学・文化

キーワード：アフリカ系アメリカ人 フェミニズム NACW 女性クラブ運動 革新主義時代 アクティヴィズム

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 19世紀末の社会情勢

南北戦争後、奴隷制廃止を契機に進みつつあった人種差別撤廃への流れは南部再建・国家再統一という大義の中で急速に後退していく。再建期が終わると南部諸州では復権した元南軍将校らによって奴隷制時代と変わらない人種差別的なジム・クロウ法が復活し、アフリカ系アメリカ人(黒人)はその支配下に置かれた。北部でも学校、職場、共同体等、社会のさまざまな場面での人種差別が黒人の自立・向上を阻んだ。

南部では識字テストや投票税の導入によって20世紀までにほぼ全域で黒人男性の投票権は剥奪された。南北戦争直後、24の北部州のうち、19州が黒人に投票権を認めていたが、北部にも人種差別主義を支持する論調が生まれた。ニューヨーク・タイムズ紙は「北部人は……もはや黒人の投票の禁止を非難しない。……自己保存本能という最高の法のもとでの投票禁止の必要性は率直に認められている」と報じた(Howard Zinn, *People's History of the United States*, 2003)。

南部復権は新しい「奴隷制」の始まりでもあった。社会的ヒエラルキーに「科学的」根拠を与えたソーシャル・ダーウィニズム、1883年公民権裁判の最高裁判決や1896年ブレッシー対ファーガソン判決等が人種・ジェンダー・階級等の差別を正当化していったW・E・B・デュボイスはこのころ「アメリカに新しい資本主義と新しい労働力の奴隷化が起こりはじめた」と述べている。南部では元奴隷が小作人として元奴隷主の農園に留まり、低賃金で搾取された。北部でも先の見えない貧困が黒人から生きる希望を奪った。

### (2) 女性の時代

戦後、大量の戦死者や若者の西部開拓で男性不在となった社会システムを担ったのは女性だった(Anne Firor Scott, *The Southern Lady*, 1970)。急激な産業化や経済規模拡大の中、女性に求められた社会的役割も変化していく。19世紀前半の私的領域(家庭)における「真の女性らしさ」信仰に代わって求められたのは公的領域で積極的に活動する新しい女性像だった(Ellen Carol Dubois, *Through Women's Eyes*, 2005)。

女性は南北戦争前、慈善団体や宗教団体を組織し、禁酒、奴隷制廃止、女性の権利のために団結して活動したが、その組織化熱は戦後さらに過熱し、1870年代から90年代にかけて全米に「女性クラブ」と呼ばれる女性組織を生み出した。各地の女性クラブや団体はさらに互いに合併して全国規模の連合体となり、大きな政治的影響力を持つようになる。フランシス・ウィラードのキリスト教婦人禁酒同盟(WCTU)、エリザベス・ケイディ・スタントン、スーザン・B・アンソニーの全国女性参政権協会(NAWSA)等の女性団体は参政権を含む諸権利を要求して活動した。女性がさまざまな分野で能動的に社会活動・改革運動に関わった再建後の時代は「女性の時

代」とも呼ばれている(Dubois)。

### (3) ブラック・フェミニズムの起源

奴隷制時代、黒人女性は人種・ジェンダーの二重の搾取に苦しめられてきた。黒人女性は女性とみなされず、男性と同じ労働者としての扱いを受けながら、一方では産む性としての性的関係や妊娠・出産を強制された。戦後、女性は奴隷制廃止によって自由・平等の実現を期待したが、彼女らを待っていたのはやはり同じ人種・ジェンダー差別だった。選挙権を得た黒人男性と政治的に切り離された黒人女性は白人女性のさらなる下の階層に置かれた。

社会的向上の鍵となったのは教育である。元奴隷の母は「知性がなく性的に放埒」というイメージを払拭するために稼ぎを子供の教育につぎ込み、次世代へと希望を託す。高等教育を受けた黒人女性は1880年代、教育職や専門職(弁護士、医師、牧師、音楽家等)に就いた(Paula Giddings, *When and Where I Enter*, 1984)。教職は低賃金という悪条件のために19世紀前半から高等教育から締め出された女性が独占していた。黒人女性も人種分離された黒人学校で教職に就くことができた。19世紀末の黒人女性教師は1万3千人を越えていた(Giddings)。

教育を受けた黒人女性は、政治的権利・社会的平等を求め、そして生き方の選択の自由を求め、アメリカ社会に対して団結して声をあげるようになる。その一つの形態が女性クラブである。1896年、全国の女性クラブをとりまとめた「全国黒人女性協会」(NACW, National Association of Colored Women)が結成され、メアリ・チャーチ・テレルが初代会長として就任した。

この研究ではこれらの社会的背景を踏まえ、女性に二重の差別を強いた過去の負の記憶がフェミニストたちを鼓舞し、差別のない未来の平等社会実現に向けての政治的動機付けとなった過程に注目する。

## 2. 研究の目的

この研究では19世紀末から20世紀初頭にかけての第一派ブラック・フェミニズム隆盛期のフェミニストのうち、奴隷制時代に生まれ、奴隷制に直接的・間接的に関わった女性を対象とする。奴隷制廃止運動に関わったフランシス・E・W・ハーパー(Frances Ellen Watkins Harper)、教育を修め教育者となったアンナ・ジュリア・クーパー(Anna Julia Cooper)、反リンチ活動家となったアイダ・B・ウェルズ＝バーネット(Ids B. Wells-Barnett)やNACW初代会長となったメアリ・チャーチ・テレル(Mary Church Terrell)らである。人種差別主義に対してこれらの女性が、どのような言葉で黒人女性性(black womanhood)を定義し、黒人女性の未来を語ったのか精査する。当時の社会・時代背景を踏まえ、デュボイスやブッカー・T・ワシントンなどの男性指導者、白人女性フェミニストとも比較しながら、黒人女性フェミニストたちの著作や講演における政治的言説を精査し、ブラック・フェミニズムの中に位置づける。

### 3. 研究の方法

南北戦争後から世紀転換期にかけて人種差別・ジェンダー差別が復活していく中、社会に対して反論し、行動を起こした黒人女性フェミニストの著作や講演から、奴隷制の記憶(歴史化)とブラック・フェミニズムの関係を読み解き、彼女らの政治的活動および主張を歴史的な文脈の中で位置づける。

#### < 具体的な研究計画・方法 >

本研究では南北戦争後から世紀転換期までを対象に 19 - 20 世紀転換期の第一派ブラック・フェミニズムで活躍した女性、フランシス・E・W・ハーパー(1825-1911)、アンナ・ジュリア・クーパー(1858-1964)、アイダ・B・ウェルズ＝バーネット(1862-1931)、メアリ・チャーチ・テレル(1863-1954)、ファニー・バリー・ウィリアムズ(1855-1944)らを用いる。これらの黒人女性は奴隷制時代のアメリカに生まれ、人種・ジェンダーの二重差別の逆境の中、いずれも教育を修め白人と対等に渡り合える知性と教養を身に付けた女性たちである。彼女らは反奴隷制運動家で黒人フェミニストのパイオニア、ソジャーナー・トルース(Sojourner Truth, 1797?-1883)やハリエット・タブマン(Harriet Tubman, 1820?-1913)と異なり、人種内での組織化によって諸権利の獲得・社会意識改革を目指した。

本研究ではこれらの女性の人生の軌跡や主張から奴隷制という過去の記憶がどのように未来への哲学や社会改革の主張に反映されているか検証する。また、その功績をその後のフェミニズムへと続く歴史的な文脈の中で考察する。

### 4. 研究成果

#### (1) 平成 24 年度(2012 年度)

平成 24 年度は 1896 年に「全国黒人女性協会」(National Association of Colored Women) 結成へと導いた黒人女性指導者の一人、メアリ・チャーチ・テレルを中心に研究を行った。奴隷の子供として生まれたテレルは経済的成功を果たした父親の下で当時の黒人としては珍しいほどの高等教育を施された。アメリカで最も早く学士の学位を取得した黒人女性の一人でもある。教員の職を得て働き始めた後も父親の経済的援助を受けてヨーロッパへの留学を果たし、フランス語・ドイツ語を習得している。その後、黒人知識人の代表として NACW 初代会長に就任した。会長を退いた後も公的機関の要職を歴任し、晩年にいたるまで政治的な言動を通して次世代の黒人女性フェミニストたちに啓示を与え続けた。確かに彼女は恵まれた家庭環境にあったものの、黒人女性であった彼女が数々の要職を勝ち取るまでに乗り越えた障害は数限りない。

・Fannie Barrier Williams, "The Intellectual Progress of the Colored Women of the United States since the Emancipation Proclamation" (1893)

・Mary Church Terrell, *A Colored Woman in a White World* (1940, Autobiography)

#### (2) 平成 25 年度(2013 年度)

平成 25 年度は、昨年度から扱っていたメアリ・チャーチ・テレルに加え、トランスナショナルな観点から同時期の日本のフェミニストに関しても調べ、日米の二人フェミニスト(テレルと平塚らいてう)の比較研究を行った。そして、その研究成果を海外の国際学会で発表した。テレルとらいてうという日米のフェミニストの出自・教育・思想などを比較しながら、その思想を歴史的に位置づけ、それぞれのエスニシティの女性らに対して果たした指導的役割を精査した。

さらに、アイダ・B・ウェルズ＝バーネットについてもリサーチを行い、彼女らが大きく関わった黒人女性クラブ運動について学会発表を行った。両者の思想には、当時欧米の白人女性フェミニストらの直接行動主義の影響が認められる。19 世紀末から欧米各国で女性参政権が法制化される 1920 年初頭までの間に、国境を越えてフェミニズム思想がメディアを通して女性らに伝播・浸透していた。女性クラブ運動発展へのきっかけとなる世界コロンビア万博から世紀転換期までのテレルとウェルズ＝バーネットの言説・思想について研究を行った。

・Victoria Earle Matthews, "The Awakening of the Afro-American Woman" (1897)

・Ida B. Wells, *Crusade for Justice: The Autobiography of Ida B. Wells* (1970)

・Lerner, Gerda, ed. *Black Women in White America: A Documentary History*. (1972)

#### (3) 平成 26 年度(2014 年度)

平成 26 年度は、クーパーとハーパーという二人の黒人女性リーダーに注目して研究を行った。ともに 1892 年に発表された二人の著作における政治的プロテストを精査した。クーパーの *A Voice from the South* は、アフリカ系アメリカ人女性による初めての本格的な評論集で、女性クラブ運動に従事し始めた黒人女性にフェミニスト理論を与えた。また、ハーパーは小説 *Iola Leroy* において、人種的アイデンティティの変化に伴う混血のヒロインの悲劇をモチーフに、当時の人種的イデオロギーの恣意性を告発した。両作品はともに「キリスト教」と「教育」という2つのテーマを扱っていることから、この2つが当時の黒人女性運動のキーワードであったことがわかる。

・Anna Julia Cooper, *A Voice from the South* (1892)

・Frances Ellen Watkins Harper, *Iola Leroy, or Shadows Uplifted* (1892)

#### (4) 平成 27 年度(2015 年度)

平成 27 年度は、女性クラブ運動の意義とクラブ女性リーダーについて調べた。中央政府からの社会的援助がない中、各地の女性クラブは、母親教室、夜間学校、働く母親の支援、保育園の設立、女性のためのシェルター事業などを通じて人種・ジェンダーの二重差別と闘う黒人女性

の経済的自立を支援した。

さらに、平成 27 年度は、南北戦争後から世紀末に至るまでの黒人女性の組織化への動きを追った。その過程で人種・ジェンダー差別に反対する白人女性の貢献があったことが明らかとなった。

- ・Frances E. W. Harper, “Woman’s Political Future” (1893)
- ・Mary I. Woods, *History of the General Federation of Women’s Clubs*. (1912)
- ・Frances Smith Foster, ed., *A Brighter Coming Day: A Frances Ellen Watkins Harper Reader*, 1990.

解放奴隷が戦後の社会で生きるためにまず必要だと感じたのが教育だった。単なる識字能力だけでなく、深い知性や教養は経済的安定や社会階層の向上につながった。中でもテレル、ハーパー、クーパー、ウィリアムズらは黒人女性の教育の重要性を訴え、教育によって自己を、そして母として娘として民族全体を向上させることを女性たちに呼びかけた。これらの黒人女性たちは教育・啓発という点から民族向上に寄与した。

これまでの研究で、世紀転換期に活躍したフェミニストの多くは南北戦争前後に生まれ、戦後、解禁された初等・高等教育の恩恵を受けて教職に就き、民族の社会的向上を側面から支援した女性である。本研究で取り上げた黒人女性フェミニストらの著作には、奴隷制の記憶や人種差別との闘いの中、民族意識の鼓舞や白人至上主義政府への抗議の言説が読み取れる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

Tamiko Miyatsu, Social and Political Activism for Moral Education: Women's International Efforts in the Antislavery Crusade, *Tohoku Studies in American Literature*, 査読有 No. 39, 2016, 5-27.

宮津多美子, 19-20 世紀転換期における黒人女性クラブ運動 ~ アイダ・B・ウェルズとメアリ・チャーチ・テレルを中心に ~、津田塾大学言語文化研究所報、査読無、30 号、2015、8-17.

宮津多美子, 革新主義時代のラディカル・ブラックフェミニズム: *A Voice from the South* における政治的レトリック、東北アメリカ文学研究、査読有、38 号、2015、15-31.

[学会発表] (計 4 件)

Tamiko Miyatsu, Women of Conscience: Women’s Narratives and the Interracial Efforts of Women in Abolitionism (oral presentation), Women’s History Network Annual Conference

2015, University of Kent, UK, September 4-6, 2015.

宮津多美子, 『悲劇の混血』神話の転覆: *Iola Leroy* における政治的アレゴリー、日本アメリカ文学会東北支部 3 月例会、東北大学、2015 年 3 月.

宮津多美子, *A Voice from the South* における政治性: 革新主義時代のラディカル・ブラックフェミニズム、津田塾大学言語文化研究所、津田塾大学、2014 年 7 月.

Tamiko Miyatsu, Daughters of transnational women’s activism in the Progressive Era: Mary Church Terrell and Raicho Hiratsuka (oral presentation), Women’s Histories: The Local and the Global, International Federation for Research in Women’s History & Women’s History Network, Sheffield Hallam University, UK, August 2013.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

宮津 多美子 (MIYATSU, Tamiko)  
順天堂大学・医療看護学部・准教授  
研究者番号: 60509660

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし